パンダヒーロー（

白紙描写

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パンダヒーロー（

【Ｎコード】

Ｎ２６３１ＢＡ

【作者名】

白紙描写

【あらすじ】

パンダヒーローの曲を聞いて何となく、書いてみました。

アキラクオリティ）

パンダのヒーローは、何色でしょう？

疑問を唱えるのがズレているようだが、そもそも、僕はあくまで、空想論理や哲学を圧縮して収縮して考え出された

一つの確信だと、思われるのですよ。

日付は、３月６日。

アキラが初めてパンダヒーローに、出会った。日です。

場所は、球場。

球場と言っても、もう使われていない。雑草達が元気に生い茂る…観るに観枯れるとてつもない風景だった。

誰のモノなのか知らない自転車と家で作った麦茶をペットボトルに詰めた些細な飲料で、噂のグラウンドとやらに向かったのだアキラ。

噂を聞けば、都市伝説だって、心霊スポットだって、一人で飛び込んでしまうアキラの好奇心は、鉄筋コンクリートよりも筋金入りで、気になった出来事、気になった事件は、分かるまで調べるというのが彼の特徴ともいえる。

つまり、アキラは馬鹿。

自転車を立ち漕ぎして、河川敷のグラウンドへ。

空はいっぱいの青空と、こまめに散りばめられた白い雲たちとが、究極の爽快さを演出させていた。

「はぁーはぁー」

坂道でも、下り坂でもない扁平な道のりは、加速とも減速とも言えないスピードで駆けめぐっていた。

おかしな話。アキラは、汗水絶やした後の麦茶が飲みたかったのだ。

何故、自転車をこぎながら、麦茶を飲まないかって？

飲めないからに決まってます。

不器用で変人扱いされていて、クラスでは上位の浮遊力を誇り、…文字通り浮いていて友達も指折りの数しか、手に入れていないアキラは、

自転車をこぎながら、ペットボトル蓋も開けることが出来ないのです。

自転車のフロント部分に取り付けて在るカゴは、…カゴの中で、ペットボトルがダンシングしている有様なのです。

手に終えないという。

息も切らしているため、完全にお飲み物は、運動の後と言うことになる。

「麦茶！ああアアあああぁぁぁぁー」

雄叫びにも似た罵声と奇声を混同させ、蒼き大空へと投げ捨てた。

次へ

アキラクオリティ）（後書き）

アキラクオリティとは、単なるアキラと言う名前を主人公にした。
それです。

1

川は、ドブ川。

対岸からここまで、結構な距離があり、その距離が川幅に繋がる。

普通、ドブとは、汚らしいイメージしかないがアキラは違った認識で感じ取っていた。

汚い場所は美化できる。

この発想は昔ながら、言われてきた先人の発見だ。単に、汚らしい場所に綺麗な花を置くと綺麗に見える。引き立てるスパイスなのだ。

アキラは、そこを過った解釈と展開で、汚い場所に真実があるとか、思ちゃってるみたい。キレイな物は真実で、汚らしい物は嘘と噂。

どの感じも口って漢字が混入しているので、言葉も嫌いです。結局たどり着く答えは、人は嫌いです。

アキラは、かなりの距離を自転車で推し進め、あのグラウンドへとたどり着く。

「来てやったぞ。グラウンドに…」

自転車を放り投げて、

言い捨てるも、このグラウンド来たのは、これで二度目だ。

この言葉は挨拶ですよ。

それで、

二度目の景色は…ゴミ？　畑？

目に映った。球場には

ゴミとゴミとが、生い茂る雑草と散乱していることだけが。確認できる有様になっていた。

「ずいぶん変わったものだな。…あ、まて、麦茶！」

放り捨てた自転車がガタリと倒れ、

麦茶だけが

傾斜に吸い込まれる。

ゴロゴロ
　ガタリガタッ

バックネットの後ろ側まで、転がった。

「取るの、めんどくさい。後にしよう」

とか、言って、コンクリ製の階段をつたい。グラウンドの土に足をやる。

粗大ゴミが部活動をやっていた。
一言言おう。電化製品しかない。
何故だろうか…分からない。

分かるすべもない。
けれど、近くに下水道処理場が在るのだけは分かる。

一度目の時、初めてここに訪れたとき、指折りの友達と鬼ごっこをしていた。覚えている。

その鬼ごっこの最中に、寄りかかったポンプをアキラはしっかり覚えている。

ポンプとは、言わないのかもしれないのだが、大きな大きなエンジン音は耳に残っている。

知的な友達が、下水道処理場へ繋がっているんだとか、言い出すから、間違いないはずだ。

けど、二度目のグラウンドには、エンジン音すらも聞こえない。ただのゴミの溜まり場になっていただけだった。

「相当変わったな。見違えるくらいに…」

次へ

2

パッパパラパッパパラパー

近くを通っていた焼き芋自動販売自動車が音をたてた。

ここを通る頻度は、余程の物で、一日十回以上は通るのであろう回数を回数する。

だから、パンダヒーローに逢ったのは、麦茶を手にとって、のどを潤し、何となく、ヌルくなった麦茶を冷蔵庫に貯蔵しようと思った頃合いだった。

勿論、その送電線が蜘蛛の子にまき散らされた、空は、まだまだ青空をさしていた。

つまり、時間はとてもゆとりがあって、パンダヒーローさんが現れるのも、いかほどかと思えた。

何かしらの、トリガーがあって、まだ、条件を満たしていないのだとするのなら、条件を探すに徹したことはないんだけれども、何もしなくても現れそうな…そんな気がした。

風は川沿いに従って、穏やかに流れている。アキラは、知るよしも無かったが水底は腐ったボールで埋め尽くされている。

観ればシュールなのだが、川全体が濁っているので、底すら観ることも出来ないのだ。

「冷蔵庫…あった」

言うとおりに、冷蔵庫はあった。在りはする、しかしけれどもどうしても、動いてなどいない。ただのガラクタだ。

貯蔵庫としてなら使えそうだけど、アキラは、別に麦茶の入った容器を保存したいわけではないので、その冷蔵庫に触れないようにしたが、ついつい触れてしまったのだ。

手が触れると、何か、物凄い、威圧感、憎悪が指先から頭のてっぺんまで伝いわたった。様な感じがした。

冷蔵庫、開けても何もないか、ゴミがあるかのどちらかだから、何の期待もしていなかった。

開けてみて分かる。

「あ…」

パンダヒーローさんが冷蔵庫にいるのが確認できた。
パンダヒーローさんは体育座りでこっちを見ている、…目の下にクマがあって、寝ていないのかなーって思っていたけど、実際は、パンダだった。

黒い黒い、模様が目の下に大きくある。

パンダヒーローを確認して直後、何をしていいのか、思い浮かばず、すかさず。

「麦茶飲みますか？」

と訪ねてみただけだった。訪ねることしかできなかった。

パンダヒーローさんのは何者なんでしょう？
なぜこうもあっさりと、目の前に現れるのでしょうか？
パンダヒーローさんは、男ですか？　女ですか？

風が醜聞のように、運ぶ腐敗のにおい。よくよく観てみると、冷凍庫部分の下の引き戸から、人の指が顔を出していた。

アキラすかさず、満足そうにないパンダヒーローさんの顔みて、

「人、…食べるんですか？」

指を下の戸棚の冷凍庫に、指し示しながら、一方的にまた、訊いてみた。

次へ

3

パンダヒーローさんは、茶色い地味なズボンを着てて、赤茶けた生地に緑のコケのマークが使用されたマントを履いていました。

腐ったパンダです。

小学生が着ていそうなTシャツ。トレンドマークはサングラスのパンダ。白地です。

「パンダヒーローさん、会いたかったんですよ？　本当に…」

無言のパンダヒーローは、一昨日の方向を向いている。何処か遠目で、空を観ている有様だ。

何か、腹でも空いているのかな？…と、アキラは思うも、人間なんて率いれていません。

食材などは、どこで調達しているのだろう…とかも思う。

「パンダヒーローとは、誰だ？」

えっ、驚かされました。

今の台詞は、パンダヒーローさんその物の声です。透き通るように耳に伝わったから、一瞬、この敷地の所有者が現れたのかと思うくらいにびっくりしました。

「パンダヒーローさん…ですよね？」

「オレは、パンダヒーローではないぞ。」

「勘違い…ですかね？　　パンダヒー…」

そういい欠けた、その時です。

「パンダヒーローです。嘘ついてました。」

丁寧に、答えて見せたパンダヒーローさん。

「…けれど、パンダヒーローなんて、長ったらしいから、『ぱだひろ』と呼んでくれよ」

この人本物なのでしょうか？

嘘かもしれませんね。本物だったのなら、そんなノリで、自分の名を省略するはずがありませんから…

「ぱだひろ…さんで、よろしいのですか？　　自分が言うのも、失礼なのですが…少し考えて、名前を改めた方が宜しいのではありませんか？」

麦茶を動き出したパンダヒーローに、渡した。さり気なく、手渡すアキラ。

特にそんな様子もなく、二度目は、パンダヒーローも手に取った。

「…そうなのか？」

パンダヒーロー、訊いてくる。

「そうですよ。誇らしい名前、変えたり、省略するのはいけません」

パンダに、その名前の意味を優しく教えてあげた。

「誇らしい名前?、意味が分からないな。オレの名前なんて何だって良いだろ?　名前なんて、只の記号」

よっと、とパンダヒーローは冷蔵庫から飛び出して、血に着地する。

ぱたり

その反動でぐらつく、冷蔵庫を背後に、パンダは麦茶を飲んだ。間接するペットボトルの飲み口。アキラはなんだか、見とれてしまった。

それだけ、魅力を持っているってことになる。パンダヒーローには、

「名前は、大切ですよ?」

ああ、大切。

「本当にか?　本当に大切か?　嘘付け。」

パンダヒーロー格好イイ。惚れたよ。マジ惚れた。

「じゃあ、自分、一方的にパンダヒーローって言わせていただきますね?」

アキラの日課は決まったようです。

パンダヒーローさんに、毎日会うこと、尽くすこと、

「えっ、」

「えっじゃ、有りません。」

パンダヒーローは、驚いた表情と反比例して、地面に突き刺さっていた金属バットを握った。

「…仕方ないか、お前の顔を観ると、しょうがない気持ちにさせる。…パ、パンダヒーローでいぃぜ」

はにかみながら、承諾を肯定してくれた。顔はよく見えないけど、照れくさそうな感じがする。

「それで、自分は、パンダヒーローさんの生け贄でイイです。」

この場合は、取って食われるのかもしれないけど、生け贄は良い意味で、友達とも呼べる。

上下関係を決めるのは、一番早く友達になれるからだ。アキラの長年の経験が熟知したともいえる技術だ。

「生け贄は、酷いことを言うな。自分が嫌いなのかよ、土でも食ってろよ」

馴れ馴れしいのか、人思いなのか、掴めない人。あの時のボケ様は何だったのか…

次へ

4

「パンダヒーローさん、地味ですね。」

絵画の位置が瞬く間に、ひやがっている。市？

このグラウンドには、四カ所の出入り口があって、絵画が転がっていた。

マウンドの近くに、密集して粗大ゴミが五大湖のように、たごまっている有様が伺えた。周りには、雑草が取り囲む。

まるで秘密基地感覚な、人気のなさ。いかに、此処が呪われているが分かる…第六感。

ピーターパンみたいなパンダヒーローは、横になっている全自動じゃない奴の洗濯機の上で、片足立てて、注射器をペン回ししていた。

クルクル

アキラが明らかに喧嘩的暴言をいっているがしかし、パンダヒーローは見向きもしませんでした。

「ダーツ遣ってる、どけ」

パンダヒーローは、片目を閉じて、アキラの背後の絵画を狙いっていた。

別に、僕の背後の絵画を狙わなくてもいいのに…と思ったけど、ＧＵＭＩの声帯が実感は言った発声で言われると、これはもう、毒しかないと思った。ので、どいた。

「パンダヒーローさん、二層ドラム式洗濯機がぐらついていますよ？　大丈夫ですか？」

二層ドラム式洗濯機とは、言わないかと思われる四角い箱の下には、（ほうし）の手とサードベースが、微妙なバランス感覚を定か待っていた。
これは、ぐらついても仕方ない歯周病と同じだ。

「おっと、ぐらつく…」

「だったら、パ…」
「んなわけ、あるか！」

木っ端微塵に起こられた。

今日はまだ始まったばかりな為、三時を過ぎる鐘が鳴ったばかりだった。

あいにく、パンダヒーローさんは、アキラをアキラだと認識してくれない様子を空中分解しているようだった。

空は、ゴムゴムの網のように、張り巡らされた送電線。よく見ると、送電線と送電線の間に、ポワイトな野球ボールが引っかかっていた。

「よっ！」

しゅばば
　じゃれ

いい感じに、絵画の女性の額に突き刺さった。狙うところが、デコで在るところがパンダヒーローらしい。

「おい、アキラ。頭に変なの突き刺さった、頭の角度がおかしい。Ｌのような目を持った少女をおまえは知らないか？」

いきなりだったため、目がかゆくなった。…はて、そのようなグロテスクな少女をアキラは知っているよしもないのだ。

誰でしょう？

あの冷凍庫の引き戸から飛び出していた指の人でしょうか？
完全に引き出してみたら、中身は分かるかもしれませんが、生きてはいないと思う。

「知りません。パンダヒーローさんが食したのではありませんか？」

パンダヒーローに言葉を弾き返した。

「オレは、人を食べないし、何も食べない。昔…アンドロイドと踊ったこと会ったから、その時、食欲消失したんだろう。恐らく…」

アンドロイドとは、何か…ホムンクルスの様なピクルス的存在か？
地味で重要。
今のパンダヒーローさんは、ピクルス以下の地味で格好良い。ハリポテさん。

「ああ、話が変わったが、ほんとに、少女の事知らないのか？　お前」

「知りませんよ。自分、友達指折りだし、そんなマニアックな人間関係構築していないし、何より、パンダヒーローさんの友達なんて知らない。初耳です」

友達と表したが、次の言葉がその言葉の無責任さを彩っていた。

「すまんが、それ、おれの妹なんですけど、」

「汗、妹の名前ぐらい覚えてくださいよ！　特徴で覚えるな！」

怒鳴ってしまった。

次へ

5

「パンダヒーローさんの妹とは、あの冷凍庫の引き出しに、飛び出した死体じゃないんですか？」

応える質問。

「あの引き出しの中を覗いたのか？　プライバシーの侵害だな…おまえ」

パンダヒーローも応える。

黙るパンダヒーローさんは、少し考えるそぶりをしてから、ふと、媚びを売る様に…飛び跳ねた。

「え、おい、あの中に人が居たのかよ、早く言えよ。そんな大事なことは！」

はじめ最初にあった時に、指を指して示したはずなのに、覚えていないとおっしゃる、パンダヒーロー。

「さっきも、人間ですか？　て聞いたじゃないですか？　覚えていないと、言う。パンダヒーローさんが頭が悪い」

パンダヒーローは、洗濯機から飛んで、地面に着地を試みる志が観て取れた。

パンダヒーローさんは、ブランコを揺らして、遠心力を利用して飛

ぶ子供のように、今、飛んだ。

空中滞空時間は、数秒ほどで、人間許容範囲内運動神経をしていたと、みた感じの感想を述べてみる。

スダ

無事無傷で着地した。

「頭が悪いのは、自覚しているつもりだが、記憶力までアホにされると、重度だな、覚えてない物は覚えてないから仕方ないけど…」

提案しようか…風に乗せて、

「ん、あ、そうだ、だったら、確かめれば良いのでは?」

「お前、俺の確信を盗み見層だから、…な。本当にあれだけは、誰にも見せたくない隠し物が潜んでいるんだ。確かめるのなら…お前は此処で、帰って貰う。」

難しい条件をみすぼらすんですね。

アキラに、居場所探らして、いざと言うと、帰れだなんて、良い使い駒になったようです。

「自分も、パンダヒーローの羞恥心に迫りたいです。保証します。絶対に誰にも言いません。あの収納スペースには何が隠されているんですか?」

と、当て付ける。

「バカ言えよ。また、たまに変な来客が現れたなー と思ったら。これだから困る。あの物の重大責任性に何も気づいちゃいないな。帰れよ。二度と麦茶持ってくるな！」

怒った。

その後の言葉を勝手に妄想させて、頂きますと、『麦茶うまくては、美味しくて、また来いよ！と言わざる終えないから、失せろ』だ。

麦茶の勝利です。アキラは負けたのです。

いや、

「待ってください。パンダヒーローさん。自分は、あなたのために全力で麦茶を入れてきますので、お願いしますから、どうにか、羞恥心の確信だけでも…」

麦茶で餌付けなんて、笑いそう。

「…う、……わかった……」

分かったみたいだった。

冷凍庫の下の収納スペースに実際に妹が居るのか、確かめるために、二足歩行した。

次へ

6

軽くパンダヒーローは、素晴らしい。
自販機に、缶を補充するお仕事をやってたパンダヒーローは、誤って、缶を地面に落としてしまいました。
缶は凄惨にも形が変形して、中身が吹き出していました。
仕方なく、パンダヒーローは今装填したばかりのお飲み物を、同じ落としたのと統合された缶を買い。
のち、無事な缶を箱に収めた。

吹き出る缶を口で押さえて、液体を飲み込んだ。
ワイルドな一面を魅せるパンダヒーローでした。

→これは、アキラの妄想で実在するパンダヒーローさんは、愚かしい哀れな小羊みたいだったようです。

「こんな話をしようじゃないか、一つ」

ポッケに手を入れ、ゆっくり前を歩きながら、顔だけアキラをみて、そう言うパンダヒーロー。

「話とはなんです？」

素直に聞いてみることにしてみよう。パンダヒーローさんからの言葉は、個人的に缶ジュースの主成分より気になる。個人的。

「話とは、話だ。通りかかる車のタイヤが止まって見えるとか、逆

回転して見えるとか、言い出す奴がいてさ…当時の俺は、『人喰いパンダと踊るノーバディー』と名だけが街々に浸透して、いってた、俺らにな。『君たちには中身がない』と極力真顔で言われたんだ」

凄く脳圧の高い話がポロリと出てきた。でも、アキラはめげずに、聴き届けた。

「そこで、踊るノーバディーは聴いたんだ。そのタイヤを見る人に…『あたしは、中身は在りませんが、心はあります。でも、パンダさんは、あたしのように中身が無いわけではありません。心は在りませんが…』と言っていたんだ。…意味分かるか？」

「わか…ります。つまり、ノーバディーさんは、物理的に空で、パンダさんは、心がからだった。結論から言って、ノーバディーさんはその言葉を否定してはいなかったとなるのですね？」

「いや、これは巧妙に仕組まれたテロリズムだったんだ。正解はそれだ。」

「テロ？」

「おれは、人を捕食して、人の心も体も全部吸収できたんだ。その行為自体は、化け物で人で在らんと言える、けど、心はしっかりあったんだぜ」

またしても、頭痛が歌う設定が脳内をクルクルさせる。

そんな設定で大丈夫なはずはない。けど、仕方なく受け入れよう…

「…内側から攻めたのってこと？」

「その通り、ご明察、バグハグ大王もその手でミクを陥れて、仲間をズタズタに引き裂いたんだってはなしだ…」

「その後、ノーバディーさんは仲間割れでどうなった…の？」

「食べた」

「その性質が働いたとかで、喰うことをやめたとか？」

「心も中も分かった」

すごい話でした、これが本当なら、僕は評価します。

「タイヤを見る人は、その後、見回りは？」

「あ…」

繋がったらしい。空気が変わったのが分かる。

錆び付いたＡＴＭのすぐ側には、パンダヒーローさんが、入っていた冷蔵庫がその場に君臨していた。

次へ

7

冷蔵庫曰わく、貯蔵庫。中身は、謎。

しかし、パンダヒーローさんが『観るなよ』相槌を打ち、あきらを在る程度の距離から近づけさせなかったため、世界の心理を暴くことも無理になってしまった…あと、　パンダヒーローの恥ずかしいと思う何か。

一度前来た時と違って、騒音がないのも気になる。この雑草まみれ、ゴミまみれのグラウンドから『騒音』を抜いてしまうと、言った通り、雑草まみれ、ゴミまみれのグラウンドになってしまうのです。おかしな話でしょ？

それに、噂でパンダヒーローは金属バットを常に持っていると言っていたので、侍のように越し辺りでぶら下げているのばかりと思っていたが、噂はこうをそうし、マント辺りまでが本当と、少しがっくりしていた。

「ほれ、タイヤを見る人だ」

パンダヒーローはいい出して、その場に敷かれたのは、カラカラに乾燥したてんで幼稚なおっさんだった。霊体ミミズが明らかに漏れ出している…
死んでいる。

「何でこの人。食べなかったのですか？　パンダヒーローさん」

疑問はそっち、あ…喰う力が無くなったんでした、言い方を変えれば、食欲が無くなった。

「不味そうだから…あ、こいつをイタブって、死体の処理に悩んでいたんだな。そこで、閉じ込めて、寝ていたら熟睡していたようで、こんな感じだ」

丁寧にここまでの段取りを言ってくれた。

「みその妹の件は？」

「思い出した。こいつにさらわれて、何処かに監禁しているんだとのことだ」

何処にいるのか、さっぱりなんだけどね…と付け足すパンダヒーロー。

何処にいるのか？

手がかりがないとなれば、探し出すのは無理。パンダヒーロー犬とか喰っているのなら、匂いで探したり出来るんじゃないかな？

「殺されてません？」

「バカ言え、あいつを殺す意味が分からない。現に、人質としてさらったとか抜かしていたけど。あいつの鼻をへし曲げてやったよ」

おいしいスープの出来上がり。

「その妹は、どのくらいパンダヒーローさんにとって、大切な存在なんですか？」

「毛蒙もない。けど、ただ何となく、必要…なんじゃない…かと。
嗚呼、悲痛に大切だ」

「どうして、大切なんですか？」

パンダヒーローは寝室と言う冷蔵から毒リンゴを取り出した。

「鍵だからな、」
「鍵とは？　何です」

毒リンゴをかじるパンダヒーロー、五時の鐘が鳴ると共に、毒リンゴを吐き捨てた。…ガムのような扱いなのか…毒リンゴは

「ここではない何処かに通じる扉の鍵」

もう一度、毒リンゴをかじり、二・三回噛んだのち、器用に毒リンゴ膨らます。
もう五時なのか…早いな。

「それは、すごい話ですね。胸が高まります。」

「お前も、その扉の向こうとか…興味在るのか？」

何か、見下したかのような目でアキラを観てきた。

「別に、興味は在りますけど、人に公開できない代物だとしたのなら、自分は触れたりはしません」

大それた物の裏には、何か、危険な罠があるのをアキラは知ってい

た。プライバシーには触れたいけど。

「絶対、触れるなよ、こいつみたいにしてやるぞ」

干からびたおっさんを川に沈めました。

次へ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2631ba/

パンダヒーロー（

2012年1月14日18時48分発行